分枝

branching
http://branching.jp
branching 14 publish : 09.September.2013

池の中のジャズバンド

Shigemichi BINNAKA 1941–
備仲臣道

牛蛙の声が聞こえる。低い石の海に広がる。菖蒲園の隅のほうの池である。枯れた葦がびっしりと生えている。あちこちにいるらしいが姿は見えない。太い低い声で、水に反響するせいかどうか、嫌に艶のある印象を、重く腹にたたえる声である。あちこちでそれぞれに鳴いているのは、縄張りを主張しているのに違いなく、この池の王は俺一人、そう思っていやしないかと、邪推することができる。

前に何回も見ているから知っているけれど、子どもの頭ほどもある暗い褐色の体躯で、前足を曲げて平たくなっているのに、どう見ても王様らしいのではない。態度や面構えは曽たらしいまでにふてぶてしく、ふんぞり返っていなくても実に堂々として見える。

風貌はルイ・アームストロングに似ていて、だから、声が太く低いのにも納得のいくところがある。アームストロングが牛蛙に似ていると言っては、悪いかも知れないけれど、蛙があちらに似ていると言うのならば、納得してもらえるのではないか、その声は太いと言っても、アームストロングよりもスーザホンの述がうに近いように思える。スーザホンは、ただ、ふあっふあっと言っているようにしか聞こえないけれど、ほかになんにもない限りはそうであっても、いろんな楽器の中に混じっていれば、立派に役目を果たしている。演奏者の頭の上に大きな朝顔が開いた、やけに存在感のある威圧的な楽器で、そんなところも牛蛙らしくないことはない。

声とともに水の中にあぶくを吹き出し、その黄色いあぶくが風船のように宙に浮かんで、ぱちんと弾けて破裂するのだろうと思う。そうすると、そこいらに牛蛙の等する妖気が漂い、幻が広がっていくのである。

春が近いことをなぜか感じ、池のリハーサルが始まる。

ピアノを弾く鯰は、大きな白い腹で鍵盤の上に覆いかぶさり、人間にはとてもできないような和音を、いくつもたたき出す。鍵えた腹筋をブみに使っているらしい様子である。ピアノの音が彼の腹の中に反響して、さらに水中ににがるのだから、この世のものとは思えないような、妙なる調べが流れるのである。

泥鰌はクラリネットを吹く。歌口をくわえると、おちょぼ口の光に何本か髭があるのが、なんとなく可笑しみを漂わせている。そうは言っても、彼はひょうきんな演奏をするわけではない、けれども、至極まじめにやっているからと言って、泥臭いとどよからかってはいけない。池の底なのだから、どこだって泥の匂いはするのである。

鯛がトロンボーンを選んだのは、なにも長いもの同士だからではなくて、自分の照にはない金管楽器の輝く美しさを見たとき、己を忘れるほどに取り乱して、一目ぼれをしたからである。身も世もなく恋いこがれて、身をこがすまでに思い焦ったが、それは胸の中のことと、まさか、人間の手にかかって市に剥ぎ林ぬされる妄動をと知らないことではあり、考えても見ない。マウスピースに唇を当てるだけに、おぼえず上気するが、ふくらませてはいけないと言われたり、赤くなるほどの頬っぺたは彼女にはない。

トロンボーンと親戚関係にあったトランペットは、こうしたバンドではどこへいっても花形であって、ここでは鯛が担当している。ほかの者たちから較べたら、金色の鱗を光らせた鯉の姿は、立派で貫録があるから、おのずとバンド・マスターということに決まったようである。自分だけが目立つのは、チームの均衡を保つためによろしくない、と、鯉は知っていながら、ポーカルも兼ねて消いのどを鯛かせるので、時々は無言のひび割れが生じるらしい。

ドラムは蛸にお似合いだが、ここは淡水なので無理な注文である。代わりにザリガニが受け持つのは、蛸ほどではないにしても、足が何本もあるからだろう。とりわけ、後ろへ跳ねる彼の妙技は、ちょっと真ねができないもので、メンバーの中で牛蛙は態度ばかりはでかくても、鳴らす音がふあっふあっばかりの、芸のない一スーザホンで、いま一つ照り映えのするものである。

バンドの十八番はディキシーランド・ジャズで、「鍋を上げて」や「聖者の行進」の、軽快な明るいリズムに乗せられて、池のほとりや周囲の野山では、冬芽がふくらみ、花が咲いて、やがては葉が開く。

花菖蒲が開花する六月になると、白やピンクや紫、黄などの花が咲き競って、たくさんの人がやってくるから、茶店もこのときだけは賑わう。花菖蒲というのは、江戸時代の中ごろに園芸品種として流行って、だから五千種類もあるという話である。

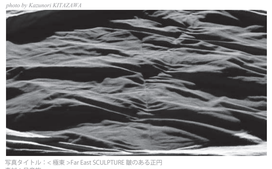
さて、風がそよぎ葉裏を返して光を散らかすと、そのうちに夏の日差しがぎらぎらと水辺に踊って、演奏は佳境に入り、秋に静かな曲をゆっくりと奏でたあと、夕日の落ちるとともに水の中も静寂に帰るのである。もっとも、せっかく演奏されるこのバンドのジャズではあるが、すべては牛蛙の妖気の中のことであり、人間の耳にはとても聞こえないようである。

冬の間は土中に深くもぐって冬眠を兼ね、春が近づくのを待って感じると、また、ふあっふあっというやつを繰り返す牛蛙であるが、そうやって幾春秋を過ごして、背中に鱗が生じるようになっても、兄雷也の暇猿に変身することは、予定に入っていない。

備仲臣道　Binnaka Shigemichi 1941–
韓国忠清南道大田生まれ 著述業
甲府第一高等学校卒　山梨時事新聞記者　月刊朝日編集発行人
2006 年、第 6 回内田百閒文学賞優秀賞受賞
著書　『蕨会照射文化』（明石書店）
『高句麗残照』（批評社）
『巨馬渡大郎と新羅』（批評社）
『ある在朝日本人の生涯』（社会批評社）
『内田百閒文学散歩』（恂星社・2013 年 8 月）ほか 5 冊。
kazenonagusa@yahoo.co.jp

They　主語のない彼等

Kazunori KITAZAWA 1949–
北澤一伯



写真タイトル：＜絶実＞Far East SCULPTURE 眺める正門
素材：日東版
場所：伊那市富県　自宅

photo by Kazunori KITAZAWA

想定内の彼等。綺麗な言葉。美しい言葉。親切に自粛を促してくれる。つまり抑止力の使い方の達人である。
知識人で批評的でどこの町にも村にもいる。
一見、政治性から離れながら、優れて政治的で思意を感じさせない。
時にはある程度に親切で人をつなぐ絆である。
「しずかな歳」という詩を書いた詩人石原吉郎の言葉から、長期にわたり、私は彼等に対し奇妙な親近感をもっている。
彼等の理論が正義なら、私は不正義である。
彼等に知があるなら、私は無知である。
彼等が綺麗なら私は汚れている。
彼等が白なら私は黒である。

綺麗な彼等の貌。眺める。
ふたつの孔もあっている。

彼等はかなり身近な悪質。
黒蟻の群のひとりである。
主語のない彼等。

北澤一伯　Kazunori KITAZAWA
1971 年から作品発表。74 年（台座を失なった後、台座のかわりを、何代 するのか）敷荊制作。80 年より農村版画の試作（蟬形）論を『アヒィンスプレーション』「現編物（いにょうち）制作。94 年以後、廃屋と民家の内部を「こころの内面」に見立てて表現空間に変える「『丘』をめぐって」連作を継続制作。
その他、敷荊制作の手法と理論による「映像展」連作。２００８年１２月、約１４年間表野県安曇市横尾にある民家に住みながら、その家の内部を「こころの内面」の象徴に見て立体することで、「こころの闇」をトランスフォームする「『丘』をめぐって」連作「残映の家」の制作を終了した。
韓国、スペイン、ドイツ、スウェーデン、ポーランド、アメリカ、で開催された版聖会展に参加。また、主家で体験した山村の農作さと地の権利をめぐる問題を、「場（ばかり）論」として把握し、口伝と物質化を試みて、レフンキタ（夫地電運／全てを失った場所で、もう一度たいせつなものをとりもどす）プロジェクトを持続しつつ、95 年 NIPAF 95 に参加したセルブ、ベイ（仏）のパフォーマンスから受けた印象を展開し、03 年より「セルブ、ベイ頃歌シリーズ」を発表している。その他「いばるな物語」連作、戦後の農村行政をモチーフにした「植林空間」がある。

《西のまちの話》《東のまちの話》

Tatsuki TSUSCADA 1986–
塚田辰樹

《西のまちの話》

その団地は、昭和 44 年に建てられた、2 階建てと 1 階建ての市営住宅で、壁面も葛びたりひびが入ったりと、リーズナブルな家賃に比例するかのような作まいだった。

団地には、周辺ではかなり有名な不良が住んでいた。小学生の時、銃バイブをもった彼らに、テレカをカツアゲされそうになったことがある。本人たち、まして冲住居周辺には近づかないことが、友人同士の暗黙のルールであった。彼らの住居の軒先は、低木が残り、派手なポスターが窓を覆い、数台の原付が止まっていた。そこに住む彼らを時折、興味本位に遠くから眺めた。爆音を立てながら原付を乗り回す様子を友人と眺め、誰某があいつの知り合いだの、誰某が補充っただのと噂し合っていた。

小学生の自分の視点ではその不良たちのせいで、その団地は柄の悪いイメージが強かった。しかし団地には不良ばっかりでなく、小学校の友人も何人か住んでおり、頻繁に遊びに行くことがあった。団地というのは道や住居を画一的に整えており、時々自分がどこを歩いているのか迷うことがしばしばだったが、そんなときは、軒先の様子を記憶しておく。青いコテージを増築しているのが誰某の家、軒先の庭に黄色い手すりを指え、菜園を作っているのが誰某の家。みんな軒先には特徴があったので、それを目指して遊びに出かけるのだった。

現在、よくよく観察すればそんなに柄の悪い場所ではなく（そもそも勝手なイメージだったのだが）、近年の修繕工事も相まって、むしろ個性豊な軒先が多く、楽しい団地だと思うようになった。また、中国系の住人が多く移り住み、飯ふれも豊かだ。

生活者の個性が浮き彫りになる様子は様々だ。物置や物干し、テラスを増築する人、ただひたすらゴミを積み重ねる人、花壇をつくったり、彩り豊かに小さな菜園を作る人、巨大なパラボラアンテナを設り付ける人、家に似合わぬ高級車を眺付ける人、中にはアヶを総充で跳跳する人までいる。

団地というものは単に平凡な間取りで、決して生活空間の豊かなつくりではないが、そのかわりにこの地域の大半の軒先には、実は多くの住人の「生活が見える」という特徴がある。もちろんカツアアがするような不良の生活ぶりなどは考慮に値しないが、それでも人間性が見え、人が生活している証拠を感じながら眺めることができる。

《東のまちの話》

《東のまちの話》

私の家の東側に、新興住宅街ができた。おしゃれでエコで機能的で、豊かな生活空間を演出できそうな、理想の家がたくさん建ち始めた。土地に利用価値を持たせるべく、高齢化で手付かずになるのを待つだけだった土地に、区画整理の手が入った。

ただ、一軒一軒はとても個性的で美しくても、一歩離れるとまるで無個性で無機質な住宅街の姿だけが見える。分譲住宅は、隣に立つ家がほぼ同じような造りなので、何軒も画一的な道路整備、住居の建設を行えば、まるで団地である。そしてまち自体が、周辺の地域環境に馴染んでいる様には見えない。それは、分譲住宅というまちの住組みに問題があるのだが、それ以上に、団地にあったような「生活が見える」という体験ができないからではないだろうか。軒先にはきれいに整えられた庭と子供の遊具、駐車場には磨かれた自動車が停めてあり、植物をメインとして造形された金属の表札は、どうやら流行っているようだ。いたって普通の家庭が想像できるが、押し並べてどの家も、これと同じような生活空間を整えているため、住人の人間性がみえてこない。

分譲中の区画付近にはモデルルームがあり、その家の室内では演出のために、あえて道具や家具を室内に揃えている。民間でこれ個がたなびき、メーカーの看板が設置されているものの、家の側面や裏手にまわってみても、モデルルームと実際の住居との区別がつかないことに驚いた。

住人が意識的に求める住居への理想は、建設された住宅そのものが持つ個性で完結している。夢のマイホームである。だが私には、これほど閉塞感を覚える住宅街はない。

私が見たいのは《西のまち》に見た、無意識に現れる住人の人間性なのだ。せっかくの一軒家であるにもかかわらず、ほぼ統一された敷地面積のなかに敷き詰められていて、隣り合う家々がどこの家も、似たり寄ったりの住人の人間性が、まちの造りによって、個々の住居に現役してしまっているのだ。

本来、団地とは無機質で人間性の見えない住居。一軒家は家族全体の人間性の見え隠れするものという具合に、真逆になるはずである。《西のまち》が獲得したものは何だったのだろうか。

一箇所に寄り集まってきた人間が、オリジナルな自分たちだけの空間と敷地を、一戸建てという形でそれぞれ手に入れること。それだけで、魅力的なまちづくりになるわけではないのだ。

《西のまち》の団地の造りは無機質ながらもそれぞれの住人が、意図的でなく自然に軒先へ、人間性を表出してきたことが鍵だと思っている。この表出が、私は本当の意味での住居の個性となるものであると考える。新興住宅街が地域や景観に馴染むには、あるいは、おしゃれな一戸建ての集まる街として魅力的になってゆくには、多様な表出を認め合う雰囲気を作る必要がある。《西のまち》も、街の独特の生活環境を作るのに、しばらくの時間を要したかもしれない。

《東のまち》にいつ表出が訪れるのか分からないが、その時が早く来ると よい。

塚田辰樹　tatsuki tsukada
1986 年生まれ　長野県出身
年金受給者
印刷会社勤務（ヴェオペレーター、dtpデザイナー）

2015 8/22–10/25 D15 @FFS_lounge gallery

日記（2015 年 8 月 19 日）

Yoshiaki HOKITA 1994–
疋田義明

アスファルトの凸凹として灰色掛かったその上に、ぽつりと映える薄い緑のカマキリがいました。陽のあたるアスファルトの地面の上、カマキリはひたひたと歩いていました。

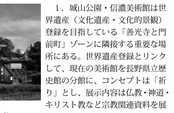
カマキリの目の前に腕を下ろしますと、カマキリはひたひたと腕を登りました。カマキリの緑色は陽の光に柔らかく輝いていましたので、ぶっきらぼうなアスファルトの凸凹のなかにあることに僕はひやひや思いました。カマキリはここにいては危ないと思いましてカマキリを草地に運ぼうと腕を動かしますと、ひょいっとカマキリはまた灰色の地面に飛び降りていきました。
その時の僕の腕を蹴るカマキリの足の感触がかすかですが妙に生々しく肌にしみついていたことに後になって気が付くのでした。

疋田義明　Yoshiaki Hikita
1994 年長野市生まれ
画家（無職）
2015 年武蔵野美術大学油絵学科卒業
za486ztch4vc7v7mm6cu@dokomo.ne.jp

2015 8/22–10/25 D15 @FFS_lounge gallery

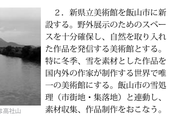
飯山市に県立美術館を新設し、現在の信濃美術館は県立歴史館の分館に

Masato IKEDA 1943–
池田正人



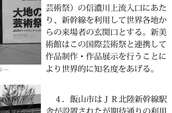
信濃美術館
教会の十字架のように見えませんか

1．城山公園・信濃美術館は世界遺産《文化遺産・文化的景観》登録を目指している「善光寺と門前町」ゾーンに隣接する重要な場所にある。世界遺産登録とリンクして、現在の美術館を長野県立歴史館の分館に、コンセプトは「祈り」とし、展示内容は仏教・神道・キリスト教など宗教関連資料を展示する。東山魁夷館の作品は自然信仰となじみ、相性が良いので連携して展示を行う。当面、現在の建物をそのまま使う。



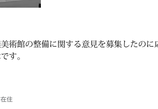
千曲川　飯山市　柏尾橋からは高社山

2．新県立美術館を飯山市に新設する。野外展示のためのスペースを十分確保し、自然を取り入れた作品を発信する美術館とする。特に冬、雪を素材とした作品を国内外の作家が制作する世界で唯一の美術館にする。飯山市の雪処理（市街地・集落地）と連動し、素材収集、作品制作をおこなう。



越後妻有トリエンナーレのポスター

3．越後妻有（新潟県十日町、津南町）アートトリエンナーレ（3 年に一度の世界最大級の国際芸術祭）の信濃川上流入口にあたり、新幹線を利用して世界各地からの来場者の玄関口とする。新美術館はこの国際芸術祭と連携して作品制作・作品展示を行うことにより世界的に知名度をあげる。



J R上越新幹線飯山駅

4．飯山市はＪＲ北陸新幹線駅含が設置されたが開待通りの利用客数に達していない。この美術館の集客力により、利用客を増大させる。

この文章は長野県が信濃美術館の整備に関する意見を募集したのに応募し、県へ提出した文章です。

池田正人　Ikeda Masato
1943 年神戸市生まれ・長野市在住
元・八十二文化財調査員、
現・あさひ酒造株式会社顧問

"甘葛"（あまづら）作り　誰か一緒にやりませんか？

Kazuya OSAMU 1973–
藤田治

古（いにしえ）の甘味、甘葛（あまづら）とは

日本列島に砂糖が伝わる以前の甘味。「甘葛」（あまづら）ツタの汁を煮詰めた、一種のシロップ。『枕草子』に「削り氷（けずりひ）にあまづら入れて、あたらしき金椀（かなまり）に入れたる」とあり、今で言うかき氷にあまづらを掛けて食したのではないでしょうか？当時あまづらは大変贅沢な貴重品で、長い間、諸国から朝廷や藤原への献納品とされていました。

因みに、砂糖が初めて日本に伝わったのは 750 年頃のこと、安土桃山時代に砂糖の輸入が増え、江戸時代には砂糖の大量生産が可能になり、あまづらの生産は消滅した。

２０１１年３月に発表された奈良女子大の研究発表の記録より引用
http://www.nara-wu.ac.jp/grad-GP-life/bunkashi_hp/amadzura/amadzura_hp.html

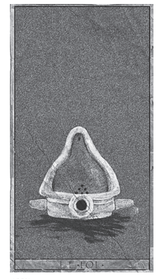
いつの日か、みんなで採った信州産のあまづらを使ってお菓子を作ってみたいものです。

藤田治門商店　店主　藤田治

藤田治 Osamu Fujita
藤田九衛門商店 代表
長野市東ノ門町 400-2
026-219-2293
fujita.kuemon@gmail.com
URL http://fujitakuemon.wordpress.com

「アートと思考」あちらの「芸術学大全」
第⑬講　答えていわなければならない。芸術は〈第二の学〉である。

Yosuke HATTORI 1976–
服部洋介



LE FOL
YATSUKA NAKAMURA INSTITUE, 2014

あれは 2009 年か 10 年のことだったかと記憶しているが、信州大学を退官した中村大東博士が、度重なる文科省との抗争（2006 年の「旭インターネット学院大学事件」など）に業を煮やしたのか、ネット上で無料の教育カリキュラムを公開するIWS とっシステムを立ち上げようとしていた知のことと、その講義で使う芸術学概論のテキストの執筆してほしいと依頼されたことがあった。当時は何かと手が回らず、結局、芸術学の項は中村教授が書いたのであるが、「そもそも芸術とはなにか」「芸術の公理」という講論はその末筆されていた。

もしこれがトマス・アクィナスであれば、こう問うたであろう。「芸術について、それはいかなるものであり、いかなる範囲に及ぶか」「芸術とは学であるか」と。その『神学大全』第一問第二節の冒論は「学はすべての明の原理から出発するものである」と主張する。同項の主文は「学には二つの類のものがある」(1) という。ざっくり言うと、理性や知性で確認可能な原理に基づく学と、神からの啓示に基づく学との二つである。後者については、理性の限界を尽くしても理性によっては知りえない原理に基づくものなので、たとえそれが真理を示唆するとしても、パートランド・ラッセルに言わせれば、真理かどうか自体を判別することができない (2)。説明不能なので、とりあえず「信じましょう」ということになる。「信じれはいいとあるかもしれない」という（信仰の話になるわけですが）ことでいいんですが、「デェシャンの《便器》は〈アート〉ですか？」って話になると、どの時代、どの場所で、誰に聞いても〈アート〉ということになるので、反証だらけである。結局、〈アート〉、〈ART〉、〈芸術〉などというものが一般に何を指しているのかが問題なのだ。

そこで村上陽は、「〈ART〉とは戦後英米美術である」という公理を打ちとてたわけである。なお、国際標準の略称型〈ART〉は、日本国内で通用している〈芸術〉とは別概念とされる (6)。もちろん、そこからの人に〈便器〉を見せて「これは〈ART〉としての〈アート〉です」とかって説明は通用しない。そこの同人の理解力の問題であることは一因ではあるのですが、じゃあ、何を理解しろってのかというと、「世界のハイブロウである〈ART〉とは戦後英米美術です」という決まりを理解しろって話である、「じゃあ、なんでそういう決まりになってるのか」って話になると、「戦勝国の文化的価値体系だから」って説明になる。つまり、日本よりも上位の〈神〉であるアメリカ・グロ・アメリカンの英国観が〈ART〉を規定しているというわけで、その価値を信奉して拝受するならば、〈ART〉もまたトマスのいう〈第二の学〉に該当するというわけである。ラッセルあたりに言わせれば、反理性的なことと甚だしい神秘主義だ。「神秘主義者のいう世界が実在するのかどうかということについては、私は何も知らない。私は、そういう世界を否定したいとは思わないし、いわんや、そういう世界を啓示する預言者とはんたいの洞察ではないということもない。私が主張したいのは（…）、検証もされずに推測され、具体的な根拠に基づいているわけでもない洞察は、それによってじっさいきわめて重要な真理の多くが別のもっとも高い水準に、真理を保証するものとしては不十分だということである」(7)。よしんば〈ART〉が素晴らしい価値の体現であろうとなかろうと、ンなことは論理的には意味の通らない〈信仰〉だというわけである。もちろん、村上も〈ART〉が唯一絶対の〈アート〉だといっているわけではないし、いわゆる〈アート〉自体の普遍的価値なるものを論理的に解明しようという意図もない。

とはいえ、村上の的鵠は、実に〈ART〉を〈アート〉や〈芸術〉と明確に区別した点にある。われわれは、これらを混同していただかれに、「〈アート〉とは何か」という一般的な問いに答えることができなかったのである。

ラッセルは「私の考えでは、新しい論理学は、ガリレオが物理学に導入した進歩と同じような種類の進歩を哲学にもたらさない、少なくとしないような種類の問題を人類の知力では及ぼがたいとして放棄しなければならないのか、わからせてくれたのである。そして、解決が可能であると思われる場合には、新しい論理学は、単に個人的な好みを表わすのではなく、意見を述べる能力のあるあらゆる人が同意しないわけにはいかないような結果を与えてくれる方法を提供することになる」(8) と言っている。〈アート〉の一般化が不可能なのは、〈ART〉、〈芸術〉、〈美術〉等々を含む〈アート〉なる普遍的な類が実在するという自明の信念が、そもそも誤っているからに他ならない。よし冲かしらの類を立てるにせよ、〈ART〉と〈芸術〉は別の類であるというべきであろうし、個人的感じ方、捉え方において〈作品〉の評価が異なるのであれば、〈芸術作品〉なるものは、それぞれに異なった個物として扱わなければならないであろう。ゆえに、個人がある個物を指して「これは〈アート〉だ」と言う時、個人の好みを超えたより上位の価値をあらわす〈アート〉なる共通普遍の概念を価値の根拠として参照することに重大な疑念を生じるのである。まして、数ある〈アート〉の中で一番偉いのは〈ART〉だという話になると、それはもはや〈神〉からの啓示である。ラッセルは、あっさりとこの種の認理を放棄する。「私たちの より人間の効力の欲望を満足させようとする希望、つまり、この世界はあれやこれやの望ましく思われる倫理的な性質が備わっているということを証明したいという希望は、私が理解できるかぎりでは、哲学が、それをかなえるために何かしてあげられるという希望ではない」(9) と。おっと、〈アート〉どころか、〈神〉のお創りになった〈かくあるべき〉素晴らしい世界の価値もあっさり否定されているではないか。すでにヴィトゲンシュタインで見た通り、〈かくあるべき〉美とかわとかいった倫理は論証の対象ではないわけである。そういえば、中村教授の口癖を「論理に徹してりゃいいのに、自由だ権利だとめんどくさい騒ぎを起こすのが、これら〈信〉に基づく〈人文学〉専攻の特さんなのである。デリダは言った。《信》を〈知〉に結び、〈知〉を〈信〉のなかで結び合わせることは、行為遂行的な動きと、事実確認的な動きをたがいに結びつけることである。「信仰告白、自己拘束、約束、引き受けられた責任、そうしたものは知の言説ではなく、行為遂行的な言説に訴えるのであり、前者が出来事を語るのに対し、後者は出来事をなしうるかぎりにおいてである」(10)。奴隷っていうか、ここ数ページの間だけでもどれくらいの確率で起こって、津波が何メートルなのかというのは、ある程度まで事実確認的と見なされる設問である。そうだとして、じゃあ、原発を作るのか作らないのか、いいのか悪いのかって話になると、各自の《信》によるわけであるから、その判断は、人間社会のもろもろを総合した〈人文学〉の領域である。だが、何をどう《信》じているのか、言ってることが事実に反してもちっともならない「データを無視している」と、理系の人に怒られると、に開き直ったり、もっとも、事実確認的な〈知〉を尊ぶはずの理系の皆さんも、〈ぐにゃぐにゃの現実〉に巻き込まれたら一巻の終わり、ある意味、趣味的な文系とは違い、カネと成果にシビアな研究環境が伴えなりと、各国でインチキ論文捏造騒ぎが相次いでいるのは、周知の通りである。ラッセルにとってこれらの問題は、ほぼ解決されたが、次の大戦では「ヒトラーのほうが戦争の脅威に勝る」として徹底抗戦を叫び、スターリンに対しては酒飲の核保有を主張した、大爆笑顔に陥会する冲者や「ラッセル＝アインシュタイン宣言」を発して核廃絶を訴えた、人間のすることはくぐちゃくちゃである。

昨今、国立大学法人の人文社会学系の学部が危急の瀬戸際にあるという一件につついては、すでに述べた。滋賀大学の佐和隆光学長は、その理由を「産業振興に寄与する可能性」が乏しいからと説明する (11)。安倍政権では産業競争力会議が文部科学行政に敢女口出しして「役立たず」の人社系諸学部を削ったとしきりに言っている。デリダが《人文学》はつねに、学術の世界とは無縁な、収益性が見込まれる資本投資に関係する純粋科学や応用科学の学部のための入資金 (12) と述べている通りである。ところが、佐和学長は「人文知を役立たずとする発想は、欧州諸国ではありえない」「人文知を修めることが欧州のエリートの必要条件」「人文知を欠く者はリーダーとしての資格を欠く、との「常識」が定着している」と言いつつ、ちょっと両者の認識に齟齬がないではないが、それはともかくも、学長は、英国では「歴史学欧州の卒業生の多くが、外交官をはじめとする官僚になる」のに対し、法学部出身が主流の日本の高級官僚の多くは、「歴史、哲学、思想などの人文知を欠くため、夜のパーティーでの高尚な会話についていけない」とし、教養的な虚学を重んずる英国に対し、日本の大学の実務系諸学部においては、学生は、歴史、哲学、社会学に無知なまま社会に送り出されてしまうとされた嘆いている。ちなみに私が学生の頃は、お受験のクソガキどもから、「東大の文学部やんて転ずかしくて履歴書に書けない」と、利用ていえば、文 1 に比べて文田はずいぶんメメられていた。同じ人社系でも、法学、政治学、経済学などは、カネになると値踏みされていたのである。

それはともかくも、〈ART〉と同じで、西欧人の真似をしてパーティーで高尚な（？）会話をすることの何が偉いのかはわからないが、とりあえず、ぐちゃぐちゃな人間社会の現場では、「人文知を少しは役に立つんだよ」っていう彼証として、次のような話もある。先日、仕事の関係である画家と会った際、「欧米では芸術や文化といった人文的な知識がなければ話ができない。その点、日本の理系の方は、もちろん、芸術に理解があるわもいらっしゃるが、概して何も知らない人たちだと思われている」という話を聞いた。この人はフランスを中心に各国で評価を得た画家で、「武蔵野美術大学グローバル人材育成プログラム」の一環として企画された海外の一線で活躍する専門家による集中講義の講師として招聘された人物であるから、それなりのお話である。ちなみにムサビが推進する当該補助事業は、文科省のグローバル人材育成推進事業（B タイプ）であり、助成額は上限は 1 億 2000 万円。いわゆるスーパーインフラのように拍のから発想であり、にもかかわらず認識の主体と対象において真の一致が成り立っているのなら、その理性的な確認手段を教えてほしいものである。こういうことは《信》ずるほかないのであり、《信》したことを《無条件に》公言することのできる《獣持性》というものが《人文学》の場にはぜひとも必要だというのである。したがって《信》が唯一とされるなら、すべては単一の信仰に同一化され、《獣持》は実現されない。「これがアート！」であはアートじゃない」というのは、どれだけ主位の権威に使う決めつけの知ならなく